
戦艦娘ラブソディ

7r6

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦艦娘ラブソディ

【Nコード】

N9681X

【作者名】

7r6

【あらすじ】

ある学校には異例の生徒がいた。彼らは宇宙戦艦が人間化したものだった。

彼女たちは二派に別れ一人の男子生徒、元の統合艦隊旗艦を我がものにしようと争っていた。

教室で校庭でそしてかえった後の宿舍で、ビームを撃ち合い周囲を破壊しながら彼女たちの活躍は続いていくのだった。

学校の中の戦艦

プロローグ

巨大な時空震が外宇宙で初めての完全無人演習中の地球連合人格付与艦隊を襲った。襲われたのは第一艦隊アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊。そして第二艦隊アジア連合艦隊。

幸いオーストラリアを中心とした第三艦隊南半球連合艦隊とイスラム及びアフリカ諸国を中心とした第四艦隊赤道諸国連合艦隊は残されていて急遽救助に向かった。

しかし彼らがそこで見たものは艦隊の姿ではなく、二、三十人の若者の姿だった。全裸で真空の宇宙空間を漂う彼らはなんと全員が生きていた。しかし彼らは人間ではなかった。

第一章 学校の中の戦艦

「大和君待つてー」

嬌声が朝の校庭に響き渡った。

国連軍付属高等宇宙軍事専門学校日本分校。校庭では三十人ほどのセーラー

服姿の女子生徒が一人の学生服姿の男子生徒を追いかけていた。

今時となつては時代遅れとしか言いようがないが、艦隊勤務はセーラーستا

イルと上の方で決めてしまったらしい。

「大和君は私達の味方よね？」

「冗談じゃないわ。大和君はあたし達の味方よ！」

女の子は二組に分かれていた。白人種と黄色人種。激しく男の子の所有権を

巡って対立していた。

人数的にはほぼ互角か。

「又やっているな。しかしあれが人間じゃないなんて」

呆れたように見学しながら男子生徒が呟く。

「でもあの娘達。最初よりだいぶ活発になってきていない？」

人とは違う存在とは思えない大騒ぎに脇の女子生徒も横に首を振った。

「違うぞ。俺は俺自身のものだ」

追われながらも男の子が主張するが、女の子達は誰一人聞いてはいなかった。

「やめないか。おまえ達は朝っぱから、何を勝手なことを言っている」

騒ぎを聞いたらしくジャージ姿の男の先生が姿を現した。

「うるさい。邪魔しないで。これはあたし達の問題なんだから」

先頭のいかにも活発な雰囲気の子が軽く手を払う。

「うわっ！」

体育の教師だったのか。体格のよい男性教師は女子生徒の軽い一撃であっさ

りと吹き飛んだ。

「先生、無茶ですって。女の子の姿をしていたって、相手は戦艦です」

追われていた男子生徒。大和が力なく呟く。

そう彼らは大和自身も含めて戦闘宇宙艦の群れ。地球連合軍連合宇宙艦隊だった。

演習中の艦隊をおそった時空震。なぜか付与された人格の姿。本来は艦のインターフェイスを具現化した姿を残し、肝心の戦闘艦の姿は消えていた。

ついに決心したのか女の子達は足を止め正面からにらみ合う。
「もう許せない。このあたし飛鳥の名にかけて大和はあたし達のものだと思い知らせてあげる」

黄色人種のリーダー、実はアジア連合艦隊旗艦、艦隊における序列一位である戦艦娘、飛鳥は憤然と叫ぶ。
日本人そのものの黒い瞳にロングの黒髪。結構背が高く、比較的

控えめな胸をのぞいては各所が存分に発達した端正な面立ちの女の子。
飛鳥はすらりと伸びた両足を地面で地面をしっかりと踏みしめ、

なんと体に縦線を走らせ、そのまま左右に分かれていく。

「主砲発射シークエンスに移行。エネルギー充填開始します」
飛鳥の体内から無機質なアナウンスが流れ出す。

「今日こそ決着をつけてあげる」
体が左右に分断されたのにもかかわらず飛鳥は元気いっぱいだ。
宣言とともに

縦方向の巨大な二つの角、クワガタムシのそれを思わせる角がせり出し、方向をきつちり、これまた気の強そうな白人種の先頭に立つ娘にあわせる。

娘達は単なるインターフェイスの具現化ではなく、元々の戦闘艦の機能をその体内に宿していたのだ。

「キャサリン、泣いて謝るなら今のうちよ」

飛鳥は冷たく吐き捨てた。

「こりもしないで艦隊決戦か？」

見学していた男生徒が青ざめる。

「避難しないと。巻き込まれたら命がないわ」

「逃げた方がいいな」

同じく顔色を変えた女子生徒の言葉に男子生徒も頷く。二人は一目散に校舎

の中に駆け込んでいった。

「芸のない。いつもの通り防いであげます」

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊旗艦。当然こちらも艦隊序列一位の白人種の娘、戦艦キャサリンも冷然と言い放つ。

飛鳥が活力に満ちた娘なら、キャサリンは気品に満ちた娘だった。飛鳥もだがキャサリンも完璧な日本語だ。対人インターフェイスである彼女

達は地球上の全ての言語を話すことができた。

長身で飛鳥以上に豊満かつ蠱惑的な肢体をそらすと豊かな金髪をふわっと広

げる。冷たい輝きを放つアイスブルーの瞳が飛鳥を見据えた。

「シールド展開。迎撃態勢に入ります」

飛鳥同様キャサリンの体内からも無機質なアナウンスが流された。「あなたが私に勝つなど不可能です」

既定事項を述べるようにキャサリンの口調に揺らぎは全くみられない。

「ご託はいいのよ。主砲発射」

飛鳥の角の間に高压のビームが収束。そのままキャサリンめがけて放たれる。

「全く芸のない」

瞬間、金髪がキャサリンの全身を覆う。ビームはその金髪を直撃。

さらに次の瞬間。弾かれたビームは軌道をそらされ虚空に消えた。
「次は私の番ですか」

つぶやくキャサリンの肢体に飛鳥同様の縦線が走った。

『緊急事態。各部シールドを展開。不測の事態に備えよ』

艦隊少女の暴走。並の暴走とは訳が違う。姿が違っても戦闘艦は戦闘艦だ。

状況によつては学校はおろか町が壊滅してしまう。

その時になってようやく校庭に緊急アナウンスが流され校舎、そして学校全

体を覆う形で青白い防御シールドが張られ始めた。

正直に言つてかなり手遅れ気味の対応ではある。

「いい加減にしてくれ。どれだけ周囲に迷惑をかけたら気が済むんだ」

さすがに逃げてもいられなくなり、大和は両者の間に割つてはい

る。
遅い体。鍛え抜かれた筋肉。飛鳥同様に日本人の色が濃い青年だ。しかし

今は疲労の影が濃い。

二つの艦隊が行動をとるときに最高司令部から派遣される総合旗艦。

複数の艦隊を束ねるだけあつて、普段はやんちゃ坊主と云つていい活気のあ

る彼だが、さすがにこんな事態が続けば疲れもたまろうというものだ。

いつもは愛嬌に満ちた面持ちに今は苦味が満ちていた。

「だから大和があたしを選べは何の問題もないのよ。いつも云つて

いるじゃない

い」
体の縦線を消した飛鳥は大和にしなだれかかると平然と云つてのける。

「私を選ぶべきです。なぜなら飛鳥さんより私の方が優れているのですから」

当然だがキャサリンも負けてはいない。慌てて縦線を消し、大和の腕をとる

と高く突きだした胸に誘う。

「やめてくれよ。仲良くしてくれ。俺は君達双方の旗艦なんだから」

一瞬だが二人の美少女の豊かな肢体に頬の肉をゆるませた大和だがそうもい

かない。必死の説得に入った。

「そうはいかないよ。大和とあたしは起源が一緒。そっちとは親密度が違うんだから」

飛鳥は頬をふくらませるといつそう力を込めて大和に抱きつく。

「起源がなんです。より優れたパートナーと一緒にするのが理の当然です。さ

あ私を選びなさい」

キャサリンの腕にも力が入る。突きだした山脈がグニヤと変形した。

「このオッパイお化け。下品なもので大和を誘惑しないで」

「貧弱な小娘。お粗末なもので何を甘えているのですか」

飛鳥とキャサリンの視線が絡み合う。

「そうだよ。飛鳥の言うとおりだよ。大和さんはあたし達のものなんだから」

「ここは日本だな。白人優位は通らないよ」

飛鳥の言葉に序列五位、小柄で悪戯そうな目つきの戦艦扶桑や序列二位の副

旗艦、目の細い少し年上の戦艦娘定延等のアジア連合艦隊少女達が同調。

さらに残りの序列六位巡洋艦娘の夏や同じく序列九位巡洋艦那智、序列十四

位最下位の強行偵察艦娘の針葉など十数人の戦闘艦娘も一斉に首をふって見せた。

「何がここは日本か。そちらにも日本艦以外がいるではないか」

「所属国は違っても、同じ学校に所属しているのに間違いはないでしょ」

アメリカ・ヨーロッパ連語艦隊所属の序列二位副旗艦の生真面目そうな戦艦

娘ゴールドバや序列三位すつきりとした顔立ちの戦艦スージーが反論を声高に叫

び返す。

同じく白人艦隊所属の序列四位戦艦娘テルビツジや序列五位戦艦メアリーも

力でバックアップしようと、体に縦線を走らせた。

ほかの娘達の乱入にさらに混乱は増し、收拾はつきそうにない。

「何をだらだらとやっている。統合旗艦のおまえが判断しないで、誰が結論を

出すというのだ。さつさと態度を決めろ」

いつの間に復活したのか男性教師が険しい顔で大和に迫ってきた。

このまま

軋轢が続けば大惨事も必然。

教師だって必死だ。

「先生、大和は繊細なの。高度なシステムで大和は組み上がっているんです」

「そうですね。彼を追いつめることはこの私が許しません」

とたんに絶妙なコンビネーションで双方の旗艦娘飛鳥とキャサリンが男性教師

師にくっつくかかる。

「いいからどつかに」「消えなさい」

二人の細腕が一閃し、男性教師は虚空に消えた。

彼女達にとって大和にものを言っているのは自分達だけだった。
「そう思っただったら追いつめないで、もっと俺の言うことを聞いてくれよ」

再び少女達の説得に入る大和。

「さて邪魔者はいなくなっただし、決着をつけようじゃない」

「邪魔者は飛鳥さん自体じゃないのですか」

いつの間にか二人の体には再び縦線が入っていた。

「お願いだよ。俺はおまえ達の旗艦じゃないのか」

疲労の色が濃い。対決姿勢を崩さない二人の娘に、このままでは俺も長くは

ないと、心の底から思う大和だった。

「……頼むから俺の言葉を聞いてくれ」

再度呟く大和。

端から見て単なるヘタレとしか思えない大和だが、容姿端麗なだけ有って艦

隊所属の女の子には哀愁漂うと好意的に解釈されていた。

そしてそう解釈していたのは戦艦娘達だけではない。

「大和君かわいそう。あんな乱暴なだけの女の子に囲まれて」

青白いシールド越し。校庭を望む窓際にたつ女生徒。肩までのシ

ョートボブ

を揺らす内気そうな娘。立木ゆかりは何とも切なそうに唇をかむ。

その瞳には思い入れが満載されていた。

「起立」

一時限目の授業。戦艦娘達の姿は彼女らだけが所属する特別クラスにあつ

た。軍事機密の意味合いもあつたが、それよりも生徒達の安全確保の側面が強い処置だ。

実際の発砲はともかく、校庭での大騒動は今朝が最初ではない。

大和の号令に一齐に戦艦娘達が立ち上がる。統合旗艦である大和は当然だがクラス委員長を務めている。

机の並び方は変則的で四列の机の左右に黄色艦、そして白色艦に分かれて座っていた。

そこまでは普通なのだが、大和はどちらに座っても角が立つので最前列、それも左右どちらにも所属せず特別に真ん中に座っている。

「礼」

再びの号令に少女達の頭が下がる。しかし頭の向きは教師ではなく、微妙に角度がつけられ大和に向けられている。

「……まったく」

担任の男性教師の顔がゆがむ。やはり自分に向けるのが当然と教師は思っていたが、女子達の感覚は違う。

旗艦である大和は艦隊総司令の代理。将官クラスだと女子は感じていた。単なる教師とは格が違うというのが女子の総意だ。

「着席」

三度目の号令で女子達も腰を下ろす。

「これから作戦立案の原則を諸君に教えていこうと思う」
男性教師が重々しく口を開く。

「大和、今日の予定だけど帰りにどっかよっていかない」

「大和様の予定に飛鳥さんの存在はないと思いますが」

教師の宣言を無視しいきなり口を開く旗艦娘飛鳥だが、しかしすぐさま同じ

旗艦娘キャサリンに話の腰を折られた。

「ちゃんと聞かんか。これは学生であるおまえ達の義務だ」

血走った視線を小生意気な女子達に向けると教師は不機嫌さ丸出しでうなる。

「ちゃんと聞いているから先生」

「私も義務から逃げたりはしませんわ」

飛鳥そしてキャサリンはシレッと答える。

「その言葉忘れたとはいわせんからな。では授業を始める」

言っと教師は黒板に板書きしつつ教科書を読み上げ始めた。

「何で大和の予定にあたしが入っていないのよ」

「なぜなら大和様の予定は私達でいっぱいですから」

飛鳥に憤激の視線を向けられてもキャサリンの態度に全く乱れはみられない。

い。飛鳥達など歯牙にもかけない風情だ。

「……なっ」

「何を勝手に決めてるの」

「決めるのは大和君じゃない」

怒りに声も出ない旗艦に変わって、扶桑やらの仲間の戦闘艦達が口々にキャ

サリンを糾弾し始めた。

「いい加減せんか。さっき授業を受けると言ったのはどうした」

姦しくさえずる女子に教師の怒りが爆発した。

「……それは」

「……こうであり」

教師の怒号に答え飛鳥とキャサリンは授業の内容を完璧に反復する。複合多

元センサーを備える戦艦娘達。

聖徳太子も真つ青のマルチ処理能力を持つ彼女達にとって授業内容など片手

間にでも何とかなってしまふ。

「……そ、その通りだ」

いつもと同じく沈黙してしまう教師だ。

「先生はそういうことを言いたいのでは」

女子達の態度に統合旗艦大和は教師に同情の視線を寄せる。何を言っても平

気で返される苦痛を大和はよく知っていた。

「大和様のご意向は私が存じ上げております。言葉に出さずとも大和様は私た

ちと一緒にいたいというのは分かっています」

意気消沈した男性教師には目もくれず、アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊旗艦

序列一位の戦艦娘キャサリンはそう決めつけた。

「美形の大和様にはそれなりに見栄えの良い我々がふさわしい」

「人には分がある。釣り合いは大切だろうな」

今度は白人艦隊のゴールドバやスージーが旗艦に同調。扶桑達、ア

ジア連合艦

隊娘に険しい視線を向ける。

「こうなったら実力行使よ」

「実力のない者が何を」

男の奪い合いに遠慮はいらない。大和の呟きには一切耳を貸さず、言い争い

はエスカレートし全員が椅子から立ち上がった。

机を蹴倒しながら旗艦である飛鳥とキャサリン以下、女子達の体に次々に縦

線が入っていく。クワガタの角が突き出た。

同時に髪の毛が仄かに光を放ち、シールド展開の準備を始める。

文字通りの戦艦娘であるアジア艦隊の飛鳥、定延、ランヴィ、愛宕、扶桑そ

して対面のアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊の戦艦娘キャサリン、ゴールドバ、ス

ージー、テルビッジ、メアリー。

主戦力である彼女達を正面に据え、側面に展開した巡洋艦娘。相手の隙をう

かがつべく教室の所々に散らばる強行偵察艦娘。

狭い教室内。全員が臨戦態勢だ。

「砲撃を開始。一斉射撃。敵を殲滅する」

「総員シールドを展開。反撃を開始」

人間形態になってからこの方。なぜか次第に性格に緩みの出てきた戦艦娘達

のたががついに外れる。

光を放っているのかと思うほど高揚した表情。確かに大和の奪い合いだが、

その感情は怒りだけではない。

戦いそのものを楽しみに全員がワクワクと、生気を全身から発散していた。

「行くよキャサリン！」

「どこからでもいらつしやい飛鳥！」

双方の旗艦の宣戦布告。キラキラと煌めく髪の毛が舞い上がり全身を覆い防

御シールドを形成。

その最中にも、両陣営から放たれた凄まじい光球が次々と教室内に炸裂す

る。爆風に吹き飛ばされながら、燃え上がる椅子や机。室内は炎に包まれた。

ついにクラスメート同士の砲雷撃戦が始まったのだ。

「何でこうなる」

地獄の業火もこの炎の前ではばやも同然。室外に被害が出るのを防止すると

ともに、教師も保護。大和のシールドが最大出力で展開された。

「本当にキャサリン達って酷いよね」

二時限目。飛鳥達とキャサリン達、両艦隊の交戦で教室は内部が完全崩壊。

教えるはずの教師も怯えてしまい、とても教室にいられる状況になく、グル

ープ学習と称したエスケープに全員が逃避。

「おまえ達も結構酷かったと思うが」

誰もいない特別教室の一室に大和とアジア連合艦隊所属の戦艦娘、旗艦飛鳥

を中心とする少女達は勝手に入り込んでいた。

「本当に大丈夫ですか？」

心配そうに大和達に視線を向け内気そうな娘。この場でただ一人の人間の娘

である立木ゆかりはきく。

ゆかりの心配も当然か。全員が煤け薄汚れていた。吐く息から黒煙がでない

のが逆に不思議なほどであった。

「どうもすまないな。こっちは大丈夫だから」

ゆかりの言葉に大和は笑みを返す。

「有り難かった。どこに行こうと思っていたら君が」

「そんな。同じ学校の仲間じゃないですか」

破壊した教室には戻れない。居場所がない。

入ったばかりの学校で右も左も見当がつかずウロウロしていた、そんな大和

達に言葉をかけてきたのがゆかりだった。

「親切にするのは当然ですから」

熱い視線で大和を見つめるゆかり。

「……当然ねえ？」

まだ二時間目。自分の授業もあるのだろうにエスケープしてまでそれに大

和に向けたその熱視線は何？

うさんくさそうにゆかりを眺めていた戦艦娘飛鳥だったが気を取り直し、改

めて大和に目を向ける。

「あつちから撃つてきたから、撃ち返したただだよ」

まあいいか。話を戻そう。当面、大和をキャサリン達の間をついて確保した

だけに、飛鳥は満面の笑顔である。

「まあ、いいけど。特に壊れたところはないな」

ここで飛鳥を追求しても怒り出すだけ。それがわかっているから大和も強く

はでられない所だ。

「大和は優しいね。あたしの幼なじみだけはあるね」

にこにこ飛鳥は甘酸っぱい笑みを見せた。

「大丈夫だよ。あいつらは守りに重点を置いているから、肝心の攻撃力はたい

したことないから」

続けていいながら飛鳥は体を寄せてくる。

「ここはあたし達だけ。あたしというかあたし達を自由にしているんだよ」

正確には違うけど。人間の娘など無視してもいい。飛鳥が大和に向けるのは

蕩けるような笑顔だ。仲間の娘達も切ない表情を浮かべ大和も困ってしまう。

「……幼なじみね」

「大和はあたしの体の奥深くを見たことだってあるよね」
甘えるように飛鳥はさらに体を寄せ、制服に手をかけた。

「……体の奥底までなんて？」

シヨックを受けゆかりは黙り込んだ。

「幼なじみといっても実態は隣接したドックで同時期に建造されただけだし、

奥底を見たといっても組み立て途中のメインエンジンなんかをセンサーの検査

もかねて、お互いに走査しあっただけじゃないか」

微妙に甘酸っぱいのかなと思いつながら大和は素っ気なく飛鳥に答える。

「かもしれないけど幼なじみなのは間違いないじゃない。大和のメインエンジ

ンはあたしより立派で少し悔しかったんだよ」

少ししらけたらしく飛鳥は体を離す。

「そういえばあたし達とキャサリン達の攻撃を一人でそらして外に被害を出さ

せなかったのは、飛鳥よりも強力なエンジンを持っていたからなんだ」

扶桑、少し小柄な娘が感心したようにいう。

「その強力なエンジン見せて」

中国娘の副旗艦、定延が飛鳥と入れ違うように大和に接近してきた。

背が高く目が糸のように細い。不思議な印象の娘だ。

「見せろといわれても」

「作業用ハッチくらいあるでしょ」

細い指先が大和の胸板を探る。

「あのっ。あのっ」

目の前の隠微な雰囲気にはゆかりが身を乗り出すも、どうしたらいいのか？と

ても言葉が続かない。

「破廉恥な。何をなさっているのです」

怒気をはらんだ低い声が大和の耳に届く。

特別教室のドアが開かれ渦巻くような金髪の娘、キャサリンが高い位置から

の視線を絡み合う定延と大和にぶつける。

当然、仲間のアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊に属する戦闘艦娘も一緒だ。

「キャサリン。大和のメインエンジンはすごいんだって。みんなで見ようよ」

怪しい笑みを浮かべ定延がキャサリンを誘う。そもそもこの状態の大和のど

こにメインエンジンがあるのか？

言っている定延すら知ったことではない。全てその場の勢いだ。

「えっ、ええ」

「楽しいよ。キャサリンも男の子の体をみてみたことないでしょ」

言葉に詰まるキャサリンの目前、定延は大和の上着の内側に手を伸ばす。

「そ、それもいいですわ」

思わず座り込むキャサリン。

「大和のエンジンはあたしが一番最初に見ることになっているんだから」

あわてて飛鳥もキャサリンの隣に座り、残った女の子達も周囲に群がってき

た。

「あたしも見ます。あたし機械工学の授業もとっていますから」

戦闘艦娘に後れをとった。意味の分からない事を言いながらゆかりも割り込

み、女の子達の丸い輪ができる。

「待て。待てったら」

うるたえる大和だが戦闘艦娘も人間の娘も、もう女の子達の勢いは止まらな

い。

「いいじゃない。大和あきらめが悪いぞ」

飛鳥も指を伸ばしキャサリンも、当然だが定延も大和の上着を引

っ張る。

残った女の子に同調。ゆかりも参戦し大和に殺到。大和は女の子の山に埋もれてしまった。

「胸板が堅い」

「腕も太い」

「男の子ってすごい」

一瞬にして上気しまくった女の子達の嬌声が特別教室に充満した。もみくち

や。人間も戦艦も何もない。みんな同じ。

ここは女の子達の戦場だ。

「待て。待てといっているだろ」

大和が女の子達の間から必死にはい出してきた。

上着がはだけシャツも開き筋肉質の胸部が剥き出しだ。

「いい加減にしないか。俺も怒るぞ」

口はともかく何とかこの場からと特別教室のドアにと向かう。

「駄目ですよ。逃がしません」

「足ならこのあたし達、強行偵察艦のほうが上ですから」

「知りたいことを知るのが偵察艦の性ですから」

しかしアジア艦隊の序列十三位若竹と序列十四位針葉そしてアメリカ・ヨ―

ロッパ連合艦隊の序列十三位エリカ。

素早く回り込んだ三隻の強行偵察艦に阻まれてしまう。

「すぐくましい」

「初めて。初めて」

大和が足を止めている間に再び女の子の包囲を許した。

「偵察させてください」

「みるだけですよ？本当です」

ここまで興奮状態になったらもう止まれない。次々にのびる細い腕がペタペ

タと大和の全身をなで回す。

「剥いちやえ。剥いちやえ」

「男の子の解剖をしちやえ」

「助けてくれ。飛鳥、俺を助ける」

たまらず大和は一番気になっている女の子、アジア連合艦隊旗艦、序列一位

の飛鳥の名前を叫んでいた。

「逃がすな。解剖しちやえ」

しかし瞳をキラキラと輝かせ一番ノリノリだったのが当の飛鳥だったから、

さすがの大和も助からない。

「やめろズボンはまずい。ここは学校だ」

いくら戦艦娘でも、相手は女の子。それに本当の人間の女の子まで混じって

いる。とても攻撃はできない。

そもそも艦隊運用に特化した大和の主装備は防御と情報解析だ。

元から攻撃

力は皆無に等しい。

「逃がしませんわ。ゴールドバ逃がしてはいけません」

大和にすぐりつくようにズボンのベルトを握りしめ、アメリカ・

ヨーロッパ

連合艦隊旗艦序列一位、戦艦娘キャサリンは所属する戦艦娘に指示を飛ばしていた。

頬が真っ赤。服装は乱れ、腰までの金髪も乱れ放題。いつもの落ち着きほど

こにやら。キャサリンも雰囲気完全に飲み込まれていた。

「やめてくれ。ズボンが脱げる」

「逃がさない。解剖よ」

「男の子。男の子」

知識はともかく、今までの実体験がまったくない元戦闘艦の娘達とゆかり。

もはや歯止めが一切かからない狂乱状態だった。

「駄目だ。俺はもう駄目だ」

「いつちやえ。いつちやえ」

お祭り状態の勢いのまま、女の子達は一斉に大和のズボンを引っ張りおろす。

「わあっ」「脱げたー」

大和はズボンもパンツも守りきることはできなかった。

後ろにいた女の子はお尻。前にいた女の子達は、それこそ言葉にできないも

の目撃者となった。

「ギャーッ」

「……なななな」

目を丸くし、完全に固まった女の子達と大和。

「死ねー。馬鹿大和」「破廉恥ー」

飛鳥とキャサリン。そして女の子全員の悲鳴。

次の瞬間、女の子達の一斉攻撃が大和に集中した。

「なぜなんだ。俺が何をした」

何とか人間の娘、ゆかりをその腕で守りながらも、生み出された特大の火球

は特別教室と大和を完璧に粉碎したのだった。

「わきゃー！」

正面から見た。もうお嫁に行けない。格好がいいのか悪いのか。フルチン男

の腕の中、ゆかりは頓狂な悲鳴を上げていた。

「なぜあたし達は校舎に入れないの」

「校庭に机と椅子ですか。完全に島流しですね」

三時限目。戦艦少女達は校庭の片隅に作られたテントの中に座らされていた。

珍しく両艦隊の旗艦、飛鳥とキャサリンが同調しつつ、不満を漏らす。

「二つも教室を破壊したのだから当然だ」

黒く焦げた大和は低く呟く。戦艦少女達の集中砲撃。その上で腕の中の少女

も何とか無傷で保護。さすがに防御に特化した旗艦。

正直こんな目にあっても壊れない自分に感心するほどだ。

「緊急職員会議を開くからと新しい先生もきてない」

「一時限の先生が心労で病院に行ったからって言うけど、要するに恐れをなし

て私達に目も合わせられないのでしょう」

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊所属の序列二位のゴールドバと三位スージーが

平然といつて見せた。

旗艦であるキャサリンもそうだが彼女達は全員が背が高くスタイルが抜群に

よい。しかし雰囲気は違っていてゴールドバは無愛想なほどに厳格、

スージーは

鋭く理知的だった。

「とにかく今度こそ騒ぎは御法度だからな」

……今はこんなにすましているけど、こいつらだって瞳をキラキラさせて絶

対ズボンから手を離さなかったからな。

……女は存在自体が不可解だ。

うなずきあう白人少女に視線をやりつつ、大和としてはこれ以上ややこしい

ことは勘弁願いたかった。

「仕方がないよ。……あたしあれをあんなに間近なんて」

思い出したのか、顔を真っ赤にした飛鳥が上目使いに大和を見つめる。

「大和が悪いんだよ。清かったあたし達を汚したんだから、ずっと旗艦として

一緒にいてよね」

それでも必死に表情を引き締めると、飛鳥は大和には理不尽とは思えない

要求をしてくる。

「見せられたのは私達だって同様です。目が汚れました。責任はとっていただ

けないと困ります」

割り込むようにキャサリンがともに大和の瞳をのぞき込む。アイズブルー

の怜悯な瞳に大和は気圧されてしまう。

「だと思えます。やはり男の子は正直に非を認めないと」

更に戦艦娘に手を貸し授業をエスケープした立木ゆかりも同罪。

同じく校庭

に島流しされていた彼女も唇をとがらす。

「俺は悪くないだろ。やったのはおまえ達の勝手だし、恥ずかしかったのも俺

だし、何で責任をとらなくちゃいけないんだよ」

飛鳥とキャサリンさらにゆかり。三人の美少女に順繰りに視線を送りなが

ら、大和は懸命の抗弁を口にした。

今度は黙って言いなりにはならない。視線には力がこもっていた。「あれだけの立派なものをお持ちになっ

ているんですから」大和の動揺を誘うつもりなのか、脇から口を出したアジア連合艦隊序列三位

副旗艦の定延が、細い目をさらに糸のようにして艶っぽくほほえむ。

「……ちゃんと剥けてたし、笠だつて」

小柄な娘、扶桑が小声で呟く。実物は知らなくてもそこは人型インターフェ

ース。電腦娘はネットにも潜り放題である。

そして扶桑は序列五位の戦艦。艦内には数百人の人間。外には漏らせない

が、その関係は男女も含めて完全把握。

知識は無限大。あの騒ぎの中、確認することはしっかりと確認していた。

「メモリーに一瞬でも記録できれば、何度でも見直せるもんね」

「赤外線に磁気共振。その気になれば後ろ側からだつて精査しちゃうもの」

さすがに並の娘とは違う。顔を赤くして笑み含みでささやきあっている姿と

は裏腹に、ほぼ全員が大和のすべてのサイズを知り尽くしているらしい。

「何ならデーター転送してあげようか」「……もういいかも」

どうやら間違いなく戦艦娘全員が大和のデーターを完全解析していたようだ。

「ゆかりさんはデーターいます？」

ただ一人の人間の娘。データー共有していないゆかりに戦艦娘の一人がきく。

「……お願いします」

恥ずかしそうなゆかりだが、その手にはモバイルタイプの情報端末がしっか

りと握られていた。

「だからなんだと言うんだ。俺がなんだろうと責任は別物だろう」

上気し頬を染めた黄色白色二群の娘達に大和はさらに声を上げた。

「だから大和はあたし達の旗艦じゃない。それも女の子であるあたし達の。い

くら数がいたって跳ね返してよね」

「統合旗艦で男性人格。全員が期待しているのですから。あなたにその程度を

期待することがいけないとでも」

サラッと飛鳥とキャサリンが大和にとどめを刺す。

「……勝手なことを言ってくれ」

理不尽だ。女子相手でもあの人数を相手に何かできるとは、大和には到底思えない。

相手は女の子。下手に力を出せば大ブーイングがくるだけだし、そもそも本

気であつてもあの状況がどうにかなる訳がないのだ。

わかつていても、俺に何とかできるはずないだと主張することは、情けな

くてとてもいえない。

低く呟くことしか大和にはできなかった。

「……内心では興味津々。恥ずかしいけど知ったことは無駄ではなかったりして」

「そうだね。今夜は興奮してうまく眠れるかな」

「メモリーを再生するのが楽しみ、楽しみ」

押し黙る大和の背後から、再び女の子達のクスクスという笑い声が聞こえてきた。

「ねえ大和君、そのそれって、やっぱり大きくなるのかな」

受けをねらったのか。半分以上女子校乗りなのか。白人種偵察艦娘の一人序

列十四位、クールベからとんでもない発言が飛び出した。

「……！」

あまりの言葉に思わず固まり絶句する一同。

「……あのっ。別に深い意味はないのよ。そのあたし偵察艦だから、味方艦の

全てのスペックも知っておいた方がいいかなって」

重い沈黙に発言した女子は真っ赤になり、引きつった笑いを漏らす。

「……一応は」

正直に言うべきか迷った。本来の姿でないこの体のスペックなど申告しなく

てもいいと思う。女子の疑問はおそらく単なる興味本位だろう。

それでもいつになったら元の姿に戻られかわからない状態。旗艦としての責

任感から大和は今朝の体験を元に短く答えた。

「大きくなるって」

「やっぱりカチカチに堅くなるのかな」

「それこそ、天だって突きまくっているに決まってるじゃない」

一斉に少女達が声高にさえずる。確かに仮想人格だが油断をしてはいけな

い。艦に乗っていた人間の行状を逐一、その目蓋の奥に収めているのだ。

耳年増の究極が姿を変えた存在でもあった。

「いい加減にしなさい。大和様は私達の旗艦。下世話なことは口にしないてください」

「キャサリンの言うとおり。今あたし達が問題にしないけなのは、そんなことではないだろ」

珍しくキャサリンと飛鳥が口をそろえる。彼女達もそれぞれの旗

艦。各艦隊

の統率をとるのも彼女達の責務だった。

「大体あたし達は本来の姿から離れているでしょ。そんな瑣末なことなどメモ

リーから消去しておきなさい」

あたしは完全保存版かな？と内心で呟くと飛鳥はもつともらしく訓告を与える。

「だって何時になったら元に戻るか。時空震の影響たって原因かもしれないけど、どうしてなんて全然わからないし」

旗艦の剣幕に頭を押さえながらも序列五位の扶桑が言いつのつた。「そんなことは言っていられませんか。今は第三と第四の二つの艦隊しか動いていない状態なのですから」

旗艦同士分かり合えるのか。キャサリンも飛鳥の立場に同調して口を挟む。

「現実問題ですが、今のところ明確な敵もいないですし明確に元の姿に戻る手段もありませんが」

「あえて言えば、相手は海賊程度。これはあたし達ではオーバースペック。警

備艇程度で十分な相手。ならば現在を楽しんだ方がお得じゃないかな」

スージの発言に定延が補足する。実際、現存する特別な敵はなく宇宙艦隊は文字通り万が一の事態に備えているだけだ。

海賊はいるが持っている船艇は惑星表面を這い回るのがせいぜいのシャトル

クラス。恒星間宇宙で活動する艦隊所属艦とは次元が違う。

もつとも恒星間武装船を建造しても襲う相手は同じ。所得も大差はないだろう。

建造費と運用費が三つか四つ桁が違うそんなオモチャを建造する愚か者は、さすがに海賊にもいなかった。

「下手に私達が動くと思わるところがあつさり撃沈して、逆に惑星表面に被害を出しかねません」

定延の補足にさらにゴールドバが乗り出し、両副旗艦の言葉にとりあえず議論は沈静化した。

基本的に各艦隊は所属する国家群の示威活動のために存在しているようなもので、実質的な意味は今のところ薄い。

その分各艦隊のライバル意識も強く、現在活動中の艦隊に心穏やかではない

のだが、今のところそれは仕方がないだろう。

「このままじゃやることもなしか。立派な男の子として、そんなじゃ大和殿

もつらいだろうから、あたしが夜もお相手しようか」

定延は冗談っぽく微笑むと大和にしなだれかかる。しかし目が薄く濡れそぼ

り、かなり本気だと誰もが思わずにはいられない。

「あ、あなたは何を考えているのですか。先ほどからおかしな媚態を振りまいて。大和様はあなたのようなアバズレは相手にはなさいません」

「そうだよ定延。大和はあたし達のもの。あんた一人のものじゃないのよ」

「それも違います。大和様は私達のもんです」

「あんた達は馬鹿。大和とあたしは幼なじみで、みんなとは同じ起源の生まれ

なの。お邪魔虫は消えなさい」

「誰がお邪魔虫ですか。気品のかけらもないあなた達につきまとわれる大和

様がお気の毒です。あなた達こそ消えなさい」

飛鳥とキャサリンは言い争いの末、椅子を蹴倒し立ち上がった。

「……あなた達のような乱暴者。どちらにしろ迷惑なのでは」

ただ一人の本当の人間。もっとも大和も本来は人間ではないので、どれだけ

のアドバンテージがあるものやら。

ゆかりはそつと心の中で呟く。

「やる気なら容赦しないよ」

「口だけで私達に勝てるつもりですか」

「愚かな、何度同じことを繰り返すつもりですか」

「その言葉そのままあなたにお返しします」

双方の旗艦の対決に艦隊所属の戦艦娘が一斉に立ち上がった。即座に全員の

体に縦線が入り臨戦態勢を作る。

まさに一触即発の事態だった。

『非常事態発生各シールド展開！各員避難態勢に』

何度も同じことが起こればさすがに対応も早くなる。校庭はお馴染みの青白

いシールド光に包まれた。

さすがに学習済み。ゆかりは素早く立ち上がると校舎に消えていく。

「全く定延め。勝手なことを言ってくれる。俺の気持ちも知らないで」

呟く大和の目の前で飛鳥を旗艦とするアジア連合艦隊とキャサリンを旗艦と

するアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊との艦隊決戦が火蓋を切った。
乱れ飛ぶ光弾。同時に煌めく長い髪の毛が体を覆いシールドと化す。凄まじ

い爆炎が校庭に充満し、もはや目も開けていられない。

「俺だつて困っているんだ」

大和の前で戦っているのはいずれも美少女。どうせ人間型のインターフエー

スを作るのなら、より見目麗しい姿が望ましいから当然のことだ。

男性型のインターフェイスである大和だつて、当たり前だが少女達に相應し

く抜群の美少年だ。

「誘ってくれるのは嬉しい。もしかして定延なら後腐れなく遊んでくれるかも

知れない。正直、抱けるものなら抱きたい」

単なるインターフエースの時は知識としてはあつても、当然だが実感として

の性欲などなかった。しかし実体を得た今は違う。

普通なら時間をかけて抑制力を身につけるのだろうが、いきなりの実体化。

感じる欲望は大和の強い意志力を持っても我慢しかねる強さだ。

大和だつて戦艦娘達と同じだ。自分に乗っていた男の兵士が彼女を連れて艦

の片隅で。

目撃するだけしかできなかったことが、今は自分だつて可能。

「しかしそれはできないんだ」

校庭では圧力に負け一次シールドを失い、二次シールドも次々と崩壊してし

まう少女が続出。

髪の毛に続いてシールドの具現たる衣服も失い、下着だけの半裸姿になる少

女があちこちで出現していた。

布の絶対量が足りないせいかな？上着ほどではないが、下着でだけでもそれなりにシールドは張れる。

まだまだ少女達の士気は高く、なかなか戦いは終わらない。

「大和はあたし達のものだ」「大和様は私達のもんです」

「本当に俺の気持ちも知らないで」

少女達の叫びを聞くまでもなく。戦艦娘の全員が自分を好きだと大和は知っていた。

より強い統率力を求め、少女達の好みを計算しつくした上で、統合旗艦に自分のパーソナリイが選ばれたのだから。

だから誘えば誰であっても自分についてくるのは確実だ。本当に望めば全員が最後までつきあってくれるだろう。

しかし同時に大和は知っていた。一つの艦隊に所属する戦闘艦は常にデータ

ーリンクし安全を確保していると。

秘密の恋人は不可能。リンクを切れば、その時点で不審に思われる。だから

一人を抱けば残りの全員にもつきあいを要求されるに違いない。

さらに艦隊同士のライバル心は強いから一つの艦隊と関係を持てば、別の艦

隊の戦艦娘に自慢するに決まっている。

結局アジア連合艦隊の十四隻とアメリカ・ヨーロッパ連合艦隊の十五隻。計

二十九人の戦闘艦娘の相手をしなければ絶対に収まりはつかないだろう。

「俺にはそれだけの体力はないんだ」

……でもっ？艦隊の娘達はリンクしているが、ほかの娘なら？一瞬、立木ゆ

かりの姿を脳裏に浮かべる大和。

不埒な事を思う大和の心の中まで見通せる訳もなく、彼の目の前でほとんど

の戦艦娘は二次シールドまで完全に破られて全裸と化していた。

なぜか一次シールドの髪の毛は破られても煌めきが消滅するだけで一応は残

るのだが、二次シールドの衣服は消滅してしまう。

髪の毛は元々戦艦娘に付属していたものだが、衣服は後から着用したもの、

だからではないか？

色々と解釈はされていたが大本の人間形態になった理由も不明なのだから、

本当のところは誰も知らない。

そういうものだとしか言い様のない現象ではあった。

「何日かはうまくいつていたのに、今日は最悪だよ。ついに机も椅子もなくな

って地面に体育座りだもの」

「今日の惨状。学校にいさせてもらえるだけでも大温情だと知りなさい」

自分だつてもろ当事者にもかかわらず、実に偉そうにアメリカ・

ヨーロッパ

連合艦隊旗艦、艦隊序列一位のキャサリンはそう言う。

四時限目。校庭の片隅に隔離されるように、シャツと短パンの体育着姿で黒

く焼けこげた地面にバラバラと座り込む戦艦娘達の姿があった。

「当然だが教師はいない。おそらく二度と俺達の前に姿は見せないだろうな」

あれだけ火器を撃ちまくったのだ。普通の人間が近づくには危険すぎるだろう。

肩を落とし大和は低く呻く。なまじエリートとして育てられただけに、この

失墜感には耐え難いものがあつた。

対して飛鳥とキャサリンは打たれ強いのか存外と平気だ。いつの間にか問答

にも絶妙な間が生じ、このまま仲良くなっていくのかもしれない。

「学校には期待していたのに」

「それは先生達の言葉。最先端の英知が詰まった現役の戦艦。全般を司る仮想

人格。さぞかし伶俐な存在がと期待していたでしょうに」

「来たのがこんな暴れ姫とはな。失望を通り越して恐怖の一言だ」

調子よく続く飛鳥とキャサリンの問答に大和も参戦。

「わかりやすい飛鳥はともかく、一見落ち着いているキャサリンも同類項とは

俺ですら知らなかった」

二人にげんなりした視線を向けると大和はさらに肩を落とす。

「なら言ってもいい。大和がこんなに統率力不足なんて知らなかったよ」

「確かに情けなかったですわ。大和様なら私達をしつかり導いてくださると信

じていましたのに」

何時の間にタッグを組んだのか、飛鳥とキャサリンは大和に逆襲に出た。

「まあまあ。仕方がないですわ。この体に馴染めば馴染むほど」

「やりたいこととやりたくないことがはっきりしてきたから」

女の子座りの序列二位定延と体育座りの序列五位扶桑が声を合わ

せると、本

来は敵対しているはずのゴルドバとスージーも口を挟んできた。

「肉体を得て戦闘艦時代の束縛感から解放されたのかもしれないな」

「言いたいことを言い合ってストレスフリーな生活ですから」

軍艦時代はいろいろな軍事機密もあり好きなこともできなかったが、こうな

った今となつてはそんな閉塞感も全てチャラだ。

生き生きとうなずきあう両艦隊の戦艦娘である。

「まさかあんなに下ネタで盛り上がるとはね」

「このメモリーは生涯完全保存版です」

「今日ほど楽しかったのは建造されて以来、初めての体験です」

残りの戦艦娘達も口々に感想を漏らす。全員が満たされた思いでいっぱい

だ。

「そんなに面白かったか。実も俺も楽しかった。逃げまどい必死に教師を守

り、それでも生き生きと好き勝手やっているおまえ達をみているのは決して悪

い気分じゃなかった」

……もつと言うことを聞いてくれていたら俺としたら楽だったけど、こんな

に心躍る体験はまず期待できなかつたろう。

そう思うと大和も麾下の戦艦娘に対して笑みを禁じ得ない自分をついに認め

てしまうのだった。

「でも大和、実際あたし達は何をしたらいいのかな」

「このまま漫然と過ごすのもさすがに考え物ですし」

ひとしきり笑いさざめきあっていた戦艦娘だがさすがに退屈してきたのだろ

う、大和に今後の行動方針を求めてきた。

「この時間は相互メンテナンスに当てようと思う」

「……メンテナンス」

「あれだけ無茶やったからな。いくら何でも少しは調べておかないと、後で不

調がでるかもしれないだろう」

「そうですね。楽しすぎて大和様に言われるまで、私もメンテナンスにまで気

が回りませんでした」

キャサリンが言うのと次々と戦艦娘達は立ち上がる。

「とりあえず校舎内に入れるよう交渉しよう。いくら何でもこんな場所ではチ

エックもメンテナンスもできないからな」

「駄目でもなんか身を隠すもの程度は確保してきて。そうそう乙女の柔肌は人

に見せられないから」

飛鳥は今までの行状を忘れたらしく、頬をピンクに染めると大和に頼み込

む。一時は全裸で主砲を撃ち合ったのだが、さすがに通常ではそうもいかな

い。

「……まずは学内のネットにアクセスして」

時々自分でも忘れてしまうほど人間らしくなってきた大和だが、やはり仮想

人格の対人インターフェイス。

ネットダイブなどお手の物であった。

「体育準備室を使ってくれて。校舎の横手にあるらしい。何か欲しいものと

いつていたけどチェックしないと欲しいものもわからないから、後で連絡をす

るといった」

「じゃあ全員移動しよう」

「全員というのは私達も含まれますの。まあ、いいですけど」

飛鳥の号令に一度は突っ込むキャサリンだが、そこはもう慣れっこ。

「いいじゃない、今更」

「そうですけど」

あっさりと飛鳥の後に続く。

「大和はどこかでセルフチェックしてて。やっぱり男女一緒にまずいから」

「あたしならどこを見られても構いませんが」

クスツと小さく笑みを浮かべ国際連合軍所属アジア連合宇宙艦隊副旗艦、序

列二位定延派スツと胸元を広げ、真っ白な肌を涼しい風に曝す。

「定延、そういう冗談は大和には通じないから。本当に全部見られとかしちゃうから」

「これだけの女の子の前でご自分のものを開陳されるお方ですから確かに」

いつの間にかキャサリンの頭の中では大和が自分で女の子に男の象徴を見せたことになっていたらしい。

「旗艦のくせにいやらしい奴だから」

当たり前のように飛鳥も大和の弁護はしない。

「……いいけどな。名前だけの旗艦か、俺は」

大和は不満だった。なぜかいつの間にか自分の扱いが下落し放題。確かに飛

鳥達に興味はあるが、ついて行くほどプライドは失っていない。

「あたしなら本当に大和殿に全てをお見せしてのよいのですが、よかったですら後

でのぞきに来てくださいね」

「だからやめなさい、定延。大和も本当に来ちゃいけないよ」

飛鳥とクスクスと笑みをこぼす定延の会話の途中、キャサリンが大和を鋭く

にらむと一言。

「ついてこられたら撃沈しますから。皆様いきましょう」

「……本当に俺に対する好意はどうなった」

体育着姿の二組の戦艦娘達が仲良く連れ立って歩いていく。笑いに包まれた

戦艦娘達の背中を見送りながら大和はさらに愚痴をこぼす。

ようやく平穏な一時間が過ぎつつある地球連合所属アジア連合艦隊とアメリカ

カ・ヨーロッパ連合艦隊の統合艦隊だった。

体験入学者である彼女達の予定は午前で終わり。しかし学校は終わっても彼

女達の一日はまだまだ終わってはいない。

宿舎の中の戦艦

第二章 宿舎の中の戦艦

「ただいまー。今、帰ったよ」

「ただいま。帰って参りました」

地球連合軍日本分遣隊基地宿舎に飛鳥とキャサリンの明るい声が響く。

「お帰りなさいませ。ご苦労様です」

軍宿舎を守る連合軍兵士が自動小銃を抱えて戦艦娘に答える。この宿舎が現

在の彼女達の住居。

結構広く大型の航空機の発着すら可能な二千五百メートル級の滑走路をも備

えた大規模基地に隣接した五階建ての建物だ。

軍事機密の固まりに近い戦艦娘がすむ場所としてはやはり国連軍関連施設し

かり有り得なかった。

「ただいま。みんな元気」

「警備してもらってありがとう」

旗艦である飛鳥達に続き戦艦娘が続々と帰ってくる。基地関連の施設にすむ

のと同様の理由で彼女達は集団行動を義務づけられていたのだ。

もっとも元々艦隊行動が普通だったので、戦艦娘達にはこれが常態。仲間同

士の会話も楽しく集団での行動に特に不満はなかった。

「ただいま。今日は疲れたな」

「お帰りなさい。今日もお疲れ様」

後続の少女達に対する兵士の口調は少し砕けたものだ。見た目は

ともかく飛

鳥達は旗艦クラス。それなりに気を遣っているのだろうか。

「今日は楽しかったよ」

「お元気そうで何よりです」

ニコニコと兵士に笑いかける戦闘艦娘。それにしても出迎える兵士達の口調

は明らかに弾んでいる。

顔も何とも嬉しそうだ。もっともこれだけの美少女が勢揃いしていればそれ

も当然か。兵士達もまた男だったから。

「帰りました」

連れだった戦艦娘と同様に大和も兵士達に軽くさげる。

大和は戦艦娘達のほぼ真ん中を歩いていった。統合旗艦である大和が撃沈され

れば艦隊としての統制がとれなくなる。

大和を守るのも戦艦娘達の責務。少女達にとっては当然の位置関係だった。

もっともいつも可愛い女の子達に囲まれやがってと言う男としての感情が兵

士達に生まれてしまうのも、それは無理からない。

「ご苦労様」

大和に対する兵士の態度は実に素っ気なかった。

「それにして軍学校に登校なさるときには制服でしたのに、今は体操服。学校

で何かあったんですか」

警備の兵士の一人が不思議そうに聞く。

「そういえば鞆などもお持ちになっていませんが」

別の一人がさらに尋ねてきた。

「学校でちよつとあつて、教室においていた鞆は焼失しちゃたの」
さすがに連合艦隊同士で大暴れしたとは言いたくない。小柄な戦

艦娘アジア

連合艦隊、序列五位、扶桑が小首をかしげ誤魔化しを試みる。

「私達とアジア連合艦隊とが対立し戦闘行為に入ったのだ。鞆は一度目の戦闘

で教室で燃え尽き、制服は二度目の戦闘で校庭で二次シールドとして消失し

た」

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊所属の副旗艦戦艦娘序列二位、ゴルドバが厳

格な雰囲気に対応しく、生真面目な表情で扶桑の補足をした。

扶桑の努力が一瞬で台無しになる。

なぜか防御の要であるシールドは一次は髪の毛、二次は着用している衣服が

当てられ消費される。

髪の毛は輝きが失われればそれで済みだが、衣服は完全に失われてしま

う。三時限目の艦隊決戦で全裸の戦艦娘が続出したのはそのためだ。

「そのときの戦いで下着も消失しましたから、今はこの下、ちょっと困ったこ

とになっています」

小さく首をかしげる細い目の定延のあけすけすぎる再補足に、兵士も戦艦娘

達も一斉に目を丸くし固まってしまう。

「校庭で大和殿とご一緒の時、膝を立てた体育座りしていた方が大勢いました

ので、覗けてしまうのではと、あたし内心ドキドキしてしまいました」

空気すら固定化した中、筒状の短パンの端を軽くつまむと、定延は頬をピンクに染めてみせる。

「大和、あ、あんたまさか」

「大和様、もしかして私達の」

固まった空気が微塵に砕け散り、双方の旗艦、飛鳥とキャサリンが大和に詰め寄る。

「大和、あたしも体育座りしてたのに」

「まさか私も見られたのでは」

扶桑やゴールドバも血相を変えて突進。さらにその周囲に二重三重の人垣ができた。

「大和様。見てないよね、絶対見てないよね。気づいていたのなら、定延もな

ぜそのときに言わないのよ」

「正直に言ってください大和様。答えによつては、あたし」

涙ぐみ必死に叫ぶ戦艦娘達。早くも体に縦線を走らせ、主砲の発射態勢に入

った戦艦娘も少なくない。

「よかった。あたしは体育座りしていなかった」「私もです」

もつともいち早く安全圏に逃れ、安堵の息を漏らす娘の姿もあったが。

「飛鳥つて娘。こんな弾けた性格だったけ」

「最初はキャサリンつて娘。気こそ強かったが、もつと理性的だったような」

「あの定延という娘。あんなに色っぽかったか」

そしてさらに驚いていたのが警備の兵士達だ。全員がより女の子らしくなっていた。

最初来たときの無機質から、目の前の生き生きとした様子。昨日より今日、そして今朝より今現在。

戦艦娘達の変貌ぶりは驚くほどだった。

「見ていない。そんなこと気づいてもいない」

戦艦娘に詰め寄せられた先では大和が両手を挙げ降参のポーズをとりつつ、必

死の弁明をしていた。二時限目の恐怖がよみがえる。

目の前のクワガタムシを思わせる二股の角。エネルギーの収束が始まってい

た。また戦艦娘達の集中砲火を浴びせられてはたまらない。

「おそらく見ていませんよ。大和殿はそんなお方ではありません」

さすがに見かねたのか定延が助け船に入ってくる。

「何でそんなことがわかるのよ。大和って。そ、その自分のものだってあたし

達に見せるような変態野郎だよ」

「そんな誤解するようなことを言うな。あれは勝手におまえ達が俺のズボンを

脱がしたんだろうが」

飛鳥の非難には、さすがの大和も黙ってはられない。このままではただの

変質者にされてしまう。

「経緯はともかく見せたのは事実よ。あえて見ないなんて、そんな自制心。大

和にあるなんて、あたしには信じられない」

「経緯が一番大切だろ。俺は紳士だよ。そっちこそ事実を見るよ、事実を」

大和の正論に飛鳥は逆ギレした。二人のにらみ合いが続く。

「自制心があるとか、紳士とか。あたしが言いたいのはそんなことではないの

です。言いたいのは要するにあたし達の大事なところを盗み見たら、大和殿が

あんなに平静でいられる訳がないってことなんですけど」

大和のことを信頼しての言動かと思っただけだ。定延は実に明快な判断基

準で、大和の行状を切っただけだ。

「確かにそうですね。私達の肝腎なところを盗み見て、大和様が顔色も変えず

誤魔化しきれはるはずありませんわね」

定延の言葉に納得し、キャサリンがようやく胸をなで下ろした。

「そうか、大和だもんね。顔が赤くもならないし、何の動揺も見せないなん

で。あいつがそんな平常心なんか持っているはずもないか」

続いて腑に落ちた飛鳥も大きく頷く。とんでもなく評価を下げていく統合旗

艦だった。

「……確かに短パンの前も膨らんでいなかったし」

最後に扶桑はトドメとばかり小悪魔の笑みを見せ、その場を締めくくった。

「とにかくこれでわかってくれたな。俺は見えていない。というより見ることが

できるチャンスがあっても、絶対に覗いたりはいしない」

正直に言えば全く納得などできない推移だった。しかしここで反論をしたら

また泥沼に落ちかねない。

自分の正当さを強調することでよしとする大和だ。

「そうしてください。どうしても見たいのならみんなに内緒で、そつとあたし

だけに耳打ちをしてくださいね？」

糸の目に媚びを凝らせ、定延は何とも色っぽく微笑むのだった。

「気をつけ。前にならえ」

久々の大和の号令が戦艦娘達の耳を直撃した。

「構え、筒！」

大和の目の前、対面。国連軍基地の片隅に二十九名の戦艦娘、巡洋艦娘、強

行偵察艦娘が居並んでいた。

手には国連軍制式銃器の自動小銃が握られている。

「ハッ。教官殿」

号令と同時に戦艦娘達が一斉に胸の前で銃を構える。旗艦の飛鳥とキャサリ

ン。さらに副旗艦の定延、ゴールドバが先頭に四列縦隊。一列約七名で彼女達は編成されていた。

軍事学校は午前中だけ。これではやることがないので国連陸軍の教練マニユ

アルに従い、旗艦の大和を教官代わりに、自主的な軍事訓練をすることにしたのだ。

本来は戦艦の彼女達に陸軍の訓練をしたからといってあまり意味はないのだが、士気の維持と規律の引き締めをねらったの特別訓練だ。

「戻せ筒！」

再び叫ぶ大和に従い自動小銃が戦艦娘の胸元に戻された。

「右向け、右！そのままランニング開始」

「ハッ。教官殿」

号令いつか、陸軍の制式迷彩戦闘服と多機能ヘルメットに身を包んだ戦艦娘

達が、足をそろえて大和の目の前、ランニングを開始する。

「いっちに！いっちに！」

アイドル顔負けの彼女達が声をそろえて走る様は、軍事訓練と言うより、ま

んまアイドルタレントの大運動会だ。

「チンタラするな。速度を上げる」

戦艦娘の後ろから細長い棒を持った大和も後を追う。甘やかして
いては士気

の維持も心許ない。

「ハッ！教官殿！」

見守る大和の目前、丸いお尻が同じリズムで揺れる。厚い生地
の戦闘服だが

女と男では骨格自体が違う。

軍事訓練の真っ最中。厳しい教官を演じるはずの大和だが、眼福
な眺めにつ

いつい胸が高鳴ってしまう。

それは何も大和一人のことではない。

「可愛いよ、飛鳥ちゃん」

「綺麗だよ、キャサリンちゃん」

弾む大きな胸や汗に濡れた顔。いつの間にかこの時間に戦艦娘達
が走って

ることが基地内に知れ渡って、手の空いた兵士やら職員がギャラリ
ーと化し応

援を送るのが通例となってしまうていた。

「ありがとうございます」

「がんばります」

声をかけられればつい返事をしてしまう。可愛い声が返ってくる
と知ればさ

らにギャラリーの数は増してしまう。

「いらない声を出すな」

俺自身が浮ついているのに、これ以上ギャラリーを集めてたまる
か。

訓練マニュアルに従い、戦艦娘達に対して当然の注意をする大和
に、ギャラ
リーの陰しい視線が突き刺さる。

「教官、横暴だぞ」

「定延ちゃん、気にすることないよ」

すっかり悪役の大和である。と、前を走っていた戦艦娘達のスピードが落ちた。

「何をしている。勝手にスピードを緩めるな」

怒鳴る大和達だが戦艦娘達の足はどんどん遅くなっていく。

「反乱されているぞ、教官殿」

「そんなに信頼されていないかい、教官殿」

何とも嬉しそうにギャラリーがはやししたてる。

「ギャラリーがうるさい。おまえ達も俺の言うことが聞けないのか」
つつい声が荒くなる大和。その間に足を緩めた戦艦娘の最後尾がついに大

和に追いつかれてしまった。

「申し訳ありません。やはり言うことを聞く訳にはいきません」

最後尾の戦艦娘、多少骨太で逞しい印象。アジア連合宇宙艦隊所属、艦隊序

列四位、戦艦娘愛宕は困ったような顔で大和に頭を下げた。

「……そんなに俺は信頼されていないのか」

心底情けなくなり大和は小さく呟いた。

「悪いわね、大和。今さっきキャサリン達と相談したのだけど」

前方、戦艦娘達の先頭に立つ飛鳥の声が大和の耳に届く。

「やはり大和様は私達の旗艦」

「一人にしておいたら、あたし達が一緒にいる意味がなくなっちゃうよ」

「大和様をお守りするのが私達の存在意義ですから」

「あたし達の全ては大和殿のもの。身も心も」

続いてキャサリン、扶桑、ゴルドバ、定延達の声が耳に届いた。

「何でい？そのモテモテぶりは」

「こんなところでハーレム作っているじゃないよ」

ギャラリーの耳にも届いた戦艦娘達の言葉に、大和に嫉妬した男達の間から

一斉にブーイングが巻き起こる。

「うるさいぞ。フラレ男ともが」

揺れる胸、明るい笑顔。足を緩めた戦艦娘達に囲まれ、思わず目尻が下がる

大和。

別の意味での悪役になってしまった統合旗艦だった。

「大和様、こちらの席が空いてますよ」

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊旗艦キャサリンの高い声が地球連合軍日本基

地に隣接した宿舎内の大食堂に響いた。

「大和はあたし達と一緒に食事をするって決まっているの知らないの？」

続いてアジア連合艦隊旗艦飛鳥の元気いっぱいの声も食堂に響く。

「寝言は寝てからになさったら」

すかさず瞳をあわせるキャサリンと飛鳥だった。

「あれだけ走ったらお腹が減っちゃった」

「この体になつての楽しみは食事だな」

さらに扶桑やゴルドバの声も後に続く。

「おっ！お姫様達の入場だぜ」

「華やかでいいな。これまではむさ苦しいだけだったからな」

とたんに巻き起こる基地所属の男性兵士達のだみ声。

「あたし等女もだっているんだけどね。まあっ、可愛いのは認めるしかないけど」

ど

苦笑しつつ、同僚をみる女性兵士達の声も混ざる。

「確かにあたし達が食事ができるなんて、今まで考えたこともなかったです」

わ」

序列五位の扶桑の言葉に序列二位の戦艦娘、定延が頷く。元々は戦艦の対

人インターフェイス。姿は人間でも所詮はホログラフィ。

ものを口にできるはずもなかった。

「みんなこのテーブルで食事をもらおう」

飛鳥が食堂の一角にしつらえられた誰も座っていない大テーブルを指さす。

二個艦隊全員が座れるここが、戦艦娘達の指定席。

やはり艦隊は同一行動が基本だろう。

「あんまり騒ぐなよ。周りに迷惑だからな」

戦艦娘達に言くと、大和が一番最初に大テーブルの壁側真ん中、一番の上座

に座る。これは統合旗艦としての当然の権利だ。軍隊は序列が一番大事だから。

「私達も座りましょう」

いつもの順序に従いキャサリンが大和の左側に着席する。

「……そうだね。立っていても仕方がないし」

飛鳥は珍しく一瞬口ごもった。

「何んなのです、あなた」

いつになく堅い飛鳥の表情に、キャサリンは訝しげに小首をかしげる。

「食事をお持ちしました」

旗艦である飛鳥達に艦隊序列の低い強行偵察艦娘や巡洋艦娘が食事運んで

きた。

「ありがとう。いつも済みません」

「俺のが持ってきてないけど」

大和が眉を潜め不満そうに言う。キャサリンや飛鳥の前には食事

の皿がきた

が、大和の前には来ない。

統合旗艦である大和は通常時、最初に食事の皿が運ばれる。序列として一番

最初だから当然の権利であり、規律の証明でもあった。

「何をしているの。大和様に早く食事をお持ちしなさい。飛鳥、今日の大和様

に食事を運ぶのはそちらの番でしたでしょ？不手際ですわ」

飛鳥をにらむとキャサリンはきつい声を出す。

「大和の食事は今運んでくるから」

目をそらしながら飛鳥はキャサリンの問いに答える。

「大和殿、食事をお持ちしました。十分に味わってお食べください」
その時になってようやく定延が食事を運んでくる。定延はアジア

連合艦隊の

副旗艦、序列では飛鳥に次ぐ。

艦隊内の序列が高いので、普通は運んでもらう側だ。

「飛鳥さん、何ですかこれは」

大和の前に出された食事をみてキャサリンの表情が険しくなる。

「えっと、あたし達手作りのご飯だけ」

飛鳥はキャサリンから目をそらす。飛鳥達の目の前に出された食事は食堂の

当番兵の作った質実剛健、見た目を気にしない内容と量で勝負の料理だ。

そして大和の目の前の食事は妙にチマチマした女の子然とした料理だった。

「なぜこんなことをするのです」

「やっぱりあんな軍隊式の飾り気のない料理ではなく、あたし達の心のこもつ

た手作り料理を食べてもらいたいじゃない？女心よ」

キャサリンの追求に飛鳥は思いつきり瞳を泳がせる。

「私の言いたいのはなぜ黙ってあなた方だけで事を運ぶのかと伺っているのです

す。こういった抜け駆けは困ります」

苦り切った表情で飛鳥をにらみつけるキャサリンだった。

「何よ。そこまで言われるほどのこと？」

「ま、まあっ。いいじゃないか。明日はキャサリン達の手作り料理を期待して

いるから。それでいいだろう」

ついにキャサリンをにらみ返す飛鳥に艦隊決戦の悪夢がよみがえり、大和は

急いで仲裁に入った。

「大和様がそうおっしゃるのならいいですけど。間違いない明日は私達の料理

を召し上がっていただきますから」

統合旗艦の大和に言われては仕方がない。渋々キャサリンは矛を収めた。

「さて、食事にしようか」

言つと大和は目の前の料理に視線をやる。見た目はおいしそうだつた。しか

しこれまでホログラフィだった戦艦娘達には当然だが調理の経験はない。

果たしてどんな味がするのか？艦内で男の兵士が初めて彼女の手作り料理を

食べさせられひどい目にあつたという話はよく聞いていた。

彼女は人間だろう。しかし目の前の料理を作ったのは人間ですらないのだ。

「美味しいよ大和。あたし達の手作りなんだから」

瞳をキラキラさせ飛鳥が弾んだ声を出す。

「食べてよ。食べてよ、大和」

小柄な戦艦娘、扶桑もワクワクと胸をふくらませ大和にせかして

くる。

「大和殿みんなで作ったのだ」

定延の視線が期待を込めて、大和の指先を見つめる。

「……」

声には出さないが残りのアジア連合艦隊の戦闘艦娘達の視線も大和に集中していた。

「じゃあ、いただくよ」

いずれ食べなくてはいけないし、そんなに待たせておけもしない。覚悟を決

めた大和の指先が動く。

スプーンにのせられた料理がついに大和の口の中に消えた。

「……味はどうですか」

キャサリンがアジア連合艦隊所属の戦艦娘の料理の腕は？と大和の表情を注

視する。

「……美味しい」

大和は低く呟く。正直に意外だったけど口の中に嬉しい衝撃が走っていた。

「初めての料理だったのか？」

大和と同じ危惧を抱いていたのか、彼の感想にアメリカ・ヨーロッパ連合宇

宙艦隊副旗艦、序列二位ゴールドバが大きく目を見開く。

「大和殿はあたし達のことをどう思っていました？ 仮にも仮想人格ですよ。調

理用コンピュータからレシピをダウンロードしてきちんと作ったのです」

アジア連合艦隊の副旗艦。ゴールドバと同じ序列二位の定延は糸の目をさらに

細めると、誇らしそうに大きく胸を張った。

「どうキャサリン。あたし達の腕は。明日のあなた達の料理が楽しみじゃな
い」

飛鳥は勝ち誇った様子でライバルであるキャサリンに視線をやった。

「とりあえず毒は作らなかったようね。ええ明日を楽しみにしていただきます
い」

少しでも怯んだ様子を見せてたまるかと、キャサリンは不敵な笑みで飛鳥を
迎え撃つ。

もつとも意外なライバルの奮戦に内心は不安でいっぱいだ。これで絶対に失
敗は許されなくなったのだ。

「これでは凡庸なできはおろか、少しくらいできがよくても、向こうの後塵を
拝しかねない状況に陥ってしまいました」

先攻のできをみて対応できる以上、後攻はより相手に勝る結果が求められて
しまう。

序列三位、スージーは冷静に彼我の戦況を分析して見せた。

「嫌なことはおっしゃらないでください」

味方の言葉にキャサリンの眉が曇った。せめて引き分けに持ち込めるよう

に、今夜は眠れないかもしれないと思う戦艦娘だった。

「本当に明日は期待しているからね」

飛鳥は明るい笑顔をキャサリンに投げかける。これが相手にどれほどのプレ

ッシャーになるか熟知しつつ。

「もついいから。本当にやめてくれ定延」

「いいではないですか大和殿。どうです、もう一口」

全員の視線が飛鳥とキャサリンに集まっていたさなか、大和の悲鳴じみた叫

び声が食堂内に響く。

みれば二人の対決を避け大和は料理を持って別のテーブルに移動していた。

「どうです大和殿。美味しいでしょう」

そしてその大和の腿に腰をかけ肩に左手を回した定延が、しきりと右手で統

合旗艦殿に料理を勧めていた。

ほとんど言うより、ズバリ酒場の膝乗り姉ちゃんだ。

「重いだろ？あまりお尻を揺らすな」

「そうでしょうか大和殿。あたしそんなに重くないと思うのですが」
「重いぞ、十分。俺の太ももは椅子じゃない」

「確かに椅子にしては大和殿の座り心地は今ひとつ。でもこの堅さに大和様の

逞しさを感じてしまいますわ」

大和の抗議を柔らかく受け流し、定延は蕩ける笑顔でさらに大和に甘える。

「だからそんなに動くなと言っているだろ」

腿に感じる定延の熱と柔らかさ。口はともかくやにさがった大和の顔を見れ

ば、一目で彼がこの状況を楽しんでいるのは明白だ。

「何をしているの定延。そして大和」

飛鳥の瞳が鋭く絡み合う定延と大和を見据える。この裏切り者とその鋭い

瞳が叫んでいた。

「何って。定延が勝手に」

頭にのぼった血が一気に下がり蒼白になる大和だ。

「大和殿が暇そうだったので、あたしがお相手を務めていました

一方の定延は悪びれもせずしなを作ると、ホウツと熱いため息を漏らす。

「何なんですか？これはいつたい。まさか私達を引きつけておいて、定延が大

和様を籠絡する手はずだったとか」

目を眇めるとキャサリンは厳しい視線を飛鳥にたたきつけた。

「何を言っているの。あれは定延が勝手に。あたしにだってあんな暴挙を許せ

るわけないでしょ。どうせやるのならあたし自身が」

飛鳥は懸命の弁明を試みようとして、逆に口を滑らせてしまう。

「なるほどね。飛鳥さん自身が和様の膝で甘えるわけですか？」

不気味な笑いを浮かべると、ついにキャサリンは体に縦線を走らせた。戦闘

態勢を急速に整えていく。

「こっちはやる気はなかったけど、戦いを挑まれて逃げるわけにもいかないか」

目の前で繰り出されるキャサリンのクワガタムシ状の角。追い込まれた飛鳥

は対決を決意し、自らの体を戦闘状態に持って行く。

「飛鳥、助太刀をするわ」

「キャサリン戦闘指示を」

扶桑とゴールドバが旗艦の危機に急いで駆け寄る。それをきっかけにして両艦

隊が一気に決戦態勢に入った。

「逃げる。速く逃げないと命の保証はできないぞ」

大和は周囲の国連軍兵士に撤退勧告を発令した。ここは今から地獄になる。

もう人が立ち入れる場所ではなくなるのだ。

『非常事態発生。食堂にシールドの展開が決定されました。各員は

すぐさまに

脱出を願います』

軍学校の惨事は既に宿舎にも伝えられていた。移動式のシールド発生装置が

青白い光を放ち、各員に避難指令が下されるのだった。

「もう許しませんわ、飛鳥さん。姑息な行いの報い地獄の底で反省しなさい」

言い放つと同時にキャサリンの角の間からビームが発射された。

「こつちこそ冤罪をそのまま受け入れるほどお人好しじゃないわ。こうなった

ら、返り討ちよ。返り討ち」

即座に飛鳥も撃ち返す。食堂は即座に灼熱の炎に包まれる。

「やめてくれ。このままじゃ俺達の居場所はどこにもなくなるぞ」

一瞬で燃え尽きるテーブルと椅子。用意された料理は誰の口にはいることも

なく、あっさりと消し炭と化する。

必死に戦闘の停止を訴える統合旗艦大和。しかし彼の命令を聞く戦闘艦はた

だの一隻もなかった。

「せっかくのお風呂です。今までできなかった入浴の楽しみを存分に堪能しましょう」

「日本のお風呂は深くて熱い。少し苦手です」

宿舎地下にある大浴場付属の脱衣場にキャサリンとゴールドバの話し声が響

く。彼女達はすでに下着姿だった。

「でもずいぶん大きいお風呂場なのですね？」

部屋から持ってきたタオルの内一枚を脱衣籠に目隠しとしてかけながら、

スージーは脱衣場内を見回す。

ここは女風呂だがいくら同性でも下着をもろに見られるのはやはり恥ずかしい。

「楽しみです」「初めてです。こんなに大勢でなんて」

あちこちから姦しく、何人もの娘達の声も響いてくる。彼女達は言うまでも

なく、アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊の戦艦娘達だ。

元々知識としてしか入浴のことは知らないけれど、地域的な習慣としてお風呂

呂は一人ではいるものだと思っていた。

たまたま日本で暮らすことになったが、大勢での入浴も悪くはないなとこの

ごろは思っている白人種戦艦娘達である。

「キャサリン様。こちらをご覧ください」

と、序列が低い戦闘艦娘の一人が旗艦キャサリンにとある場所、脱衣籠が並

んでいた隅の一角を指さす。

「結構な人数が先に入っているようです。おそらく十数人かと」

「……十数人？」

妙な数の符号にキャサリンが一瞬考え込む。

「なかなか広いお風呂じゃない。それもあたし達の貸し切り」

旗艦の沈黙に他の娘達も静まる。その時だ。脱衣場と浴室を遮る扉から騒々

しい声が響いてきた。

「飛鳥もこうしてみると結構色っぽかったりして」

「扶桑だつてなかなかのものよ。でも、やっぱりあたしだつてこう肌が桃色に

染まっていればね。この姿なら大和も一撃必殺」

ケラケラと笑うその声はアジア連合艦隊旗艦の戦艦娘飛鳥のもの

だ。

「嫌な巡り合わせもあったものね。正直な話、あの子達と一緒に入浴は勘弁してほしいものだわ」

思わず顔を曇らせたキャサリンはおとがいに指を当て考え込んでしまう。

「ならば引き返しますか。今ならまだあの連中も気づいていないと思うのですが」

ゴルドバはキャサリンに目を合わせると撤退の具申をする。

「それは駄目です。確かにあの娘達と一緒に入浴は、私達にとって気持ちのよくない結果に終わる可能性もあります。しかしだからといって私達があの娘達

に背を向けるのなんて絶対にだめです」

……引き下がる。それもあの小生意気な小娘に背を見せて。それは自分のプライドをひどく傷つけるに違いない。

即座にキャサリンはゴルドバの提案を却下した。

「ならば正面から乗り込みましょう。あのような貧弱な小娘。私達の完璧なブ

ロポーシヨンの前では敵ではありません」

いつになくスージーが挑発的な提案を持ち出してきた。基本的に冷静な彼女

だが何度となくの交戦がスージーを攻撃的にしていた。

「そうですね。背を向けるなど論外である以上、真正面から堂々と乗り込むのみです」

キャサリンはスージーにまともに視線を合わせ大きく頷いた。「では参りましょうか。全艦、前進。これより敵を撃破します」

キャサリンはタオルを肩にかけると櫓を飛ばす。通常なら前をタオルで隠し

て浴室にはいるのだが、これは既に戦い。

あえて小娘達に自分の肢体を見せつけてやる覚悟だった。

「全員キャサリン様に続け。これより入浴を行う」

「ようし、あたしのプロポーションも小娘に見せつけてやるわ」

「決戦よ。決戦」

全員が肩にタオルを肩にかけると整列。堂々と浴室に入っていくのだった。

「あらっ。あなた達もお風呂？」

「あなた達も暖まっているようね」

小さめの公衆浴場ほどもある浴室に二組の戦艦娘達が対峙した。

強ばった面持ちの白人種戦艦娘に多少の訝しさを感じたものの、

飛鳥は湯船

から首を伸ばすと、特になんと言うこともなくキャサリン達を迎える。

「なかなかいいお湯です。温泉でないのが少し残念ですが、これはこれで十分に気持ちいいお湯です」

奥に大きな湯船が二つ。両側の壁には鏡やシャワー。ごく普通の大浴場。

鏡を前に濡れ髪で体中泡まみれの定延が気持ちよさそうに呟く。

「そうみたいね。西洋式のバスタブとは違うけど、これはこれで風情がある

わ」

定延の脇を通るとキャサリンは悠々と湯船に向かう。

「ちよっと。まずかけ湯をしてから湯船に。これはマナーだから」

飛鳥と一緒に湯船につかっていた扶桑はキャサリン達が全く足を止めないの

で、慌てて説明を始めた。

「それから湯船で石けんを使うのも駄目だよ。それが日本式だから」
「わかつているわよ。私達だって初めてここのお風呂にはいるわけじゃないんだから」

キャサリンは軽く手を振ると扶桑に続いて説明を始めた飛鳥の言葉を遮り、
冷たく飛鳥達アジア連合艦隊の戦艦娘を見据えた。

「前も隠さないの。ずいぶん挑発的ね」

タオルを肩にかけ、その姿のまま見下ろすキャサリンに飛鳥の口調も冷たい。
「私達はそちらのような、貧弱お子様体型じゃないから」

大きな胸を見せびらかすように突き出すと、キャサリンは冷たく微笑む。
「確かにお子様はいるけど」

飛鳥は小柄な戦艦娘扶桑にチラツと視線をやる。体も小さいが各部も未発達。

達。特に胸は洗濯板の一言ですませられる憤ましさだ。

「余計なこと言わないでよ。飛鳥だって大きいとはお世辞にもいえないじゃない」
「ん」

味方の裏切りに、プンと小鼻をふくらます扶桑。

「まあまあ。ここは体と心の疲れをとるところなのですから、穏やかに、穏やかに」

「……そうね。私も悪かったわ」
割って入った定延。東洋人にあるまじき結構な胸のふくらみに気圧され、キ

ヤサリンは手桶をとるとザバツと体にお風呂の湯をかけた。
「熱っ！何なのよ、この熱湯は」

途端に巻き起こる絶叫。

「何よ、大げさな。食堂で何千度という高温のやり取りしたばかりでしょ？」

冷たくキャサリンをさげすむ飛鳥。確かに戦闘状態では何千度という高熱で

も平気な戦艦娘達だったが、通常時は常人と大差はない。

つまり熱いものは熱いのだ。

「水を入れて。少しさまさないと、とても入れない」

「軟弱ね。あたしなんてこれでも温いくらい。胸ばかり大きくても、肝心の克

己心とかはどうなっているのかしら？」

キャサリンの悲鳴をあつさりと無視。小気味よく鼻を鳴らし、飛鳥は思いつ

きり顔をあさつての方角に向けた。

「何ですって。あなたは江戸っ子親父ですか？」

「おいっ。あまり無理をするなよ。我慢してもいいことはないぞ」

憤激のあまりか？メモリーのどっかからおかしなたとえをだしたキャサリン

の耳に意外な声が届いた。

「大和様」「大和」

飛鳥とキャサリンの声がハモる。

「隣の男子浴室だ。ちよつと騒がしいぞ。風呂くらい仲良く入れよ」
旗艦らしく落ち着いた口調で大和が苦言を呈してくる。

「私は悪くありません。こんなに頼んでいるのに意地悪をしている飛鳥さんが

問題なんです。第一こんな熱湯に平然と入っていること自体が異常なんです」

キャサリンは大和に同情させようと涙混じりに訴える。

「大切なところも丸出しの破廉恥女が何を？最初にこれ見よがしな態度をとっ

て挑発してきたキャサリン達にこそ問題があるんじゃない。そもそもこんな程

度、自制心があれば平気です」

対して飛鳥もキャサリンの軟弱を切って捨てた。

「……全部丸出し」

ポツリと大和が漏らす。

「大和様も立派な男性。どうやら私達の立派な体に興味がおありのようです

わ」

思わず大和が黙り込んだのをみて、キャサリンは別の方向から飛鳥に揺さぶ

りをかけてきた。

「何よ。全裸なのはあたし達だって一緒じゃない。だいたいあなた達みんな似

た体型で画一的なのよ。こっちはロリに豊満にバランス型と色とりどり。大和

がみて興奮するのは、絶対にあたし達よ」

ここまでできたら負けられない。扶桑、定延、自分と次々と指さす飛鳥だった。

「何とでもおっしゃい。こうなったら実力で勝負よ」

「実力って男風呂に乱入ってこと？」

どちらに興奮するか大和に選んでもらう？ 過激な提案に驚き、飛鳥はキャサリンから一歩遠ざかる。

「違うわ。それでは私達が有利すぎ。結局私達に残された道と言ったら、真っ

向からの力勝負だけ。そうじゃない」

言いながらもキャサリンの体に縦線が走る。

「どっちが有利かは知らないけど、それは確かに」

納得し飛鳥も体に縦線を走らせた。第何次目かの艦隊決戦だ。

「待ておまえ達。すでに食堂を破壊した後だぞ。今度やったらさすがに宿舎だ

って追い出されかねん」

不穏な空気に大和があわてた。もはや肩身が狭いなどという状態ではない。

実は先ほどまで浴室には先客がいた。

それが大和が入ったとたんに我先に逃げ出してしまう始末。もはや完全にシ

ヤレになっていない。

「確かにそれは望ましくない事態ですわ」

「ここを追い出されたら寝る場所の確保だって難しいわ」

両者の縦線が消滅する。キャサリンの言葉に飛鳥が頷く珍しい事態だ。

「火力が駄目なら残されたのは腕力勝負ですか？」

「それはあたしも嫌いじゃないな」

ゴルドバの提案に定延が乗った。両者の体格はにている。

向き合う二人。案外と好敵手かもしれない。

「いいですかキャサリン様？」

「少なくともビーム砲を撃ち合うよりは平和的です」

ゴルドバと定延。それぞれの副旗艦は旗艦に視線を向けた。ゴルドバは真剣

な、定延はどこか面白がっているような。

「それは単独。それとも乱戦？」

「乱戦の方が面白くない。人数的にも大体釣り合うし」

ジリジリと接近する両陣営の戦艦娘。全員やる気満々だ。キャサリンの問い

に仲間を見た飛鳥が答える。

「じゃあ、そういうことで。ゴーツー！」

「みんな行くよ！」

水しぶきを上げ浴槽から飛び出す戦艦娘。浴槽の中で迎え撃つ戦艦娘。さら

に浴槽に飛び込む戦艦娘。

乱戦が始まった。

「それっ。はやく沈みなさい」

「撃沈するのはあなたよ」

「壊れる。壊れる」

浴槽内で組み合う戦艦娘。洗い場で蹴りを放つ戦艦娘。筋肉がき

しみ、打撃

が両者の間を行き交う。

全裸のまま大きく股が開かれる。どうせ女の子同士だ。羞恥心は宇宙の彼方

に吹き飛んでいた。

凄まじい打撃音が浴室内に響く。実は彼女達は肉弾戦でも馬鹿にできない攻

撃力を誇っていた。

質量慣性制御システム。あまり知られてはいないのだが、体内に大型の火器

を内蔵する戦艦娘の体重は優に数十トンを誇る。

それをシステムが調整し、普通の女の子並みの体重に制御していたのだ。

本来は大型化が進みすぎ機動力の低下を招いた戦闘宇宙観の機動力を回復す

るための機構だったが、使えるものは何でも使ってしまう。

戦いに役立つのなら尚更だ。

「死になさい。飛鳥さん！」

「死ぬのはキャサリン、あんただ！」

戦艦娘達は一瞬だけ制御を緩め百トン単位の打撃を繰り出す。陸軍に制式採

用されているロボット兵器だって彼女達の前では無力だろう。

それほどの乱戦が広いとはいえ、所詮は浴室内で繰り広げられたのだ。とて

も無事で済むはずがなかった。

壁にヒビが走り、シャワーノズルが粉碎。浴槽からは大量のお湯が吹き上がる。

「意外にしつこい！」

「そう簡単にはやられません！」

その中で特に激烈な戦いを展開していたのは両艦隊の副旗艦、ゴールドバと定延だ。体格が同格で力量も拮抗していた。

しかも戦艦娘は全員国連軍式格闘術をダウンロードして使用していたので、

持っているスキルすら互角。

「しかしこれはこれで結構面白い」

「かも知れませんわね」

洗い場を戦場にした二人の長い手足が鞭のようにしなり鋭い打撃を放つ。

お互いの打撃を流れるような動作で優雅に受け流す。

攻守は瞬時に入れ替わり、戦いの行方は未だ判然とはしない。しかしここは

浴室内。

「えっ。何」「もらった」

ゴールドバの足が転がっていた石けんを踏んでしまったのだ。さすが定延の

長い足がゴールドバの腹部に突き刺さった。

「くそ畜生！」

踏ん張りが効かず、派手に吹き飛ぶゴールドバ。そのまま男子浴室との壁を突き破り、男風呂に飛び込んでしまう。

「……ゴルドバ、おまえ」

呆然と呟く大和。ゴルドバは吹き飛んだ姿勢のまま大きく股を広げて大和の足下に転がり込んでしまった。

「……見ましたね」

お互いに全裸。見たくないものの、内心見たくてたまらなかったもの。とも

に丸出しのままのご対面であった。

「……破壊します」

固まった大和、そして両艦隊の戦艦娘達。一人ゴルドバの体に縦線が走りク

ワガタムシの角状の主砲がゆっくりと突きだし、そして浴室は消し飛んだ。

「やつと今日も終わりか。何とか波瀾万丈な一日だったような」
ゴルドバの暴発の後始末も終わり、飛鳥は大きく口を開けあくびを漏らして
いた。

「始末書の提出ですむとは正直思わなかったな」
隣を歩く大和も似たようなものだ。

「しかし酷い言われようですわ」
落ち込んだ様子でキャサリンが呟く。

「おまえ達のような疫病神は即座に追い出したいが、下手に外に出せばどんな

惨劇を引き起こすか。そう考えたらとても追い出せないだからな」
さすがに苦々しく大和もキャサリンに同調する。

「それでもここから出て行かされたら正直困るから。何とか居残れてあたしは
ホッとしているけどね」

「とりあえず新しい部屋につきましたわ。今日はこのまま寝てしま

いましよ
う」

キャサリンが大きな両開きのドアの前で足を止めた。ここが大和達の新しい部屋というか隔離所。

元は大倉庫。ここくらいしか全員の収納は難しいに違いない。

これまでは数人で分かれて居室していたのだが、それだかなりの部屋数と

それに伴うシールド発生システムが必要とされとても数が足りない。これまではそんな必要性など認識されていなかったが。

シールド発生システムの数足りないなら、部屋数そのものを減らせばいい。

い。実に合理的な判断ではあった。

「危険物は一括管理が原則だが、下手に集めすぎると臨界量を突破してしま

い、かえって危険という気もするが」

統合艦隊居室。脇に書かれたドアを一瞥し、大和は大きく息をつく。

「学校と宿舍。両方で何力所もビームで灼いたら、この程度の扱いは仕方ないよ」

あきらめを込めて飛鳥が大きく肩をすくめた。

「それは分かりますが、何でこんなことに。今までは何とかうまく折り合いを

つけてやってきたというのに」

自分で自分が信じられないと言いたげにキャサリンも肩をすくませた。

「人型になって我々の自己抑制は明らかにゆるんでいる。そもそも人型になっ

た原因すら分からない現状では自己管理を徹底するしかないだろう

な。頼むか

ら飛鳥とキャサリン、おまえ達もしつかりと頼むぞ」

「分かっているけど、人型になってなまじ肉体を手に入れ、本当の意味で大和

と結ばれるかもしれないと思うと」

「つつい熱くなつてしまいます。それに飛鳥達とのけんかも実は楽しくて、

つい歯止めがきかずにエスカレーションしてしまうのです」

「そうだったの？実もあたしも。ドタバタとキャサリン達とやり合うのが本当に」

「だからやめろと言っているだろ。注意している矢先から瞳をキラキラさせる

な。自己管理を徹底させてくれ、頼むから」

「大和殿お帰りなさいませ」

入り口で大和が意気消沈していると、ドアが内側に開き、黒っぽい色合いの

上着にズボン。国連陸上軍の軍服を着用したアジア連合艦隊副旗艦の定延が姿を見せた。

「お帰りなさいませ！」

直立不動で同じく軍服姿。ずらつと居並ぶ戦艦娘、巡洋艦娘、強行偵察艦娘

が一斉に声をそろえる。

「お帰りなさいませ。お疲れ様でした」

アメリカ・ヨーロッパ連合艦隊副旗艦のゴールドバが静かに頭を下げる。彼女

も又地球連合陸上軍の軍服に身を包んでいた。

「ただいま。何だ、その格好は」

「先ほど使いの者が見えまして規律はまずスタイルからということ

で軍服の着

用を命じていかれました」

「本当なら直接の命令系統にない者の命令は受けなくなかったけど、これまで

の騒動を考えるとさすがに断り切れなくて。大和殿達の軍服も預かっています

から」

大和の問いにゴールドバと定延が答えた。

「一応、私達にサイズが合っているか着用も命じられたので。違っていたら後で取り替えに応じるそうです」

「なるほどこうしてみると少しは軍人らしいか」

正直、なぜ陸軍なのかの疑問は残るが、あまり宇宙軍としての存在を見せた

くないのかも知れないのかと思い、とりあえず大和は我慢することとした。

「一番奥真ん中に大和殿の布団。後は序列に従い艦隊別に布団を敷きました。

これでよろしいでしょうか」

さすがに元は倉庫。板敷きの床はどこか埃っぽい。そんな中にずらりと敷かれた布団。

悲しくなるくらい安っぽい雰囲気だ。

「私としてはベッドがよかったのですが、入りきらないから不許可だそうです」

ゴールドバが少し悲しそうに付け加えてきた。

「いいのじゃないか。こんなものだろう」

大和は鷹揚に頷く。贅沢を言ったらきりがない。

「どう大和。あたし達も着替えてきたわ」

「これは華やかさにかけます。私の好みではありません」

双方の旗艦。飛鳥とキャサリンも陸軍の軍服に着替え、それぞれの感想を述べた。

「大和様もお着替えをどうぞ」

「体に当てればだいたい分かる。こんなものだろう」

黒っぽい軍服に袖を通すまでもなく軍服を受け入れることを決めた大和は、

改めて全戦闘艦娘の顔を見回す。

「仕方がない明日からに備えて今日は寝るか」

「分かりました統合旗艦殿！」

今日はさんざん恥をかいてしまった。こんな様では？明日からの自分達の命

運に思いを寄せる大和の目の前で戦艦娘達の着替えが始まる。

「な、何をやっているのだ？」

焦った口調で大和が問いたです。

「統合旗艦殿が寝ると命じましたから」

「寝るときにパジャマなんかに着替えるのは当然でしょ？」

馬鹿丁寧な口調で言う戦艦娘も含め、クスクスと忍び笑いを漏らしながら、

手早く戦闘艦娘たちの着替えは続く。

「だからと言って」

必死になって目を背けながら、なおも焦る大和の顔が赤い。

「どうせお風呂であたしたちの全部を見せちゃたし、今更ね？」

「覗かれるのは嫌ですけど、見せる程度なら平気かなって？」

いざという時の度胸は女の子の方があつた。これだけ人数。数を頼りに大和を

押しまくる戦艦娘達だ。

当然の結果だが、それなりに華やかな下着が一斉に咲き乱れ思わず目を閉じ

た大和に、定延が思わぬ決定を伝えてきた。

「それからあの時一緒にお使いの者に言われましたが、通学は一時停止。簡単

に言つと停学です。理由は分かるだろうと言っていました。尚その間、あたし

達は陸軍に一時入隊させられるそうです」

「な、何だつて？ 陸軍に入隊。……しかし、さっきまで俺達は司令部に？」

軍服着用を命じられたときに気づくだろう普通、俺。下着の乱舞は魅力的だが、そんな場合ではない。思わず大和は声を詰まらせた。

「正直に言つて停学で済んだのは奇跡でしょう。退学にならなかったのがむしろ不思議です。お礼参りを恐れたのかも知れません」

冷静にゴールドバが評論をする。しかし今日起きたことを見ていれば、艦隊娘

のお礼を怖がるのは当然だろう。

「どうもメインで暴れていた飛鳥やキャサリンには直接伝えたくなかったよう

です。宇宙軍の最高司令部の合意は既にだされたそうですけど」

完全に言葉を失い固まる大和に、定延はさらに明細を伝えてきた。

「……仕方ない。明日に備えて体を休めておくか？」

諦めきつた大和は改めて就寝を命ずる。

「大和様。軍の一時入隊ですが後日日程を伝えてくださるようです。準備があ

るので少し時間が必要で、明日から即という訳では」

覚悟を決めた大和に定延が水を差す。しかしもうどうでもいいとばかり大和

は何も言わなかった。

艦隊の面目を失い、迷走を始めたアジア連合艦隊とアメリカ・ヨ

ー ロッパ連

合艦隊の統合艦隊。

何はともあれ明日はもうすぐやってくる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9681x/>

戦艦娘ラブソディ

2011年10月27日15時18分発行